

鈴屋にみる文字コミュニケーション

白石 克己

【抄録】

書簡の交流を基礎とする鈴屋の遠隔教育では文字コミュニケーションが重要な意味をもっていた。もちろん宣長の遊学時代も鈴屋での門人指導も、対面教育での口頭コミュニケーションが欠かせなかった。しかし、宣長はおびたしい書写や熱心な公刊活動などによって文字コミュニケーション主体の遠隔教育や対面教育を実施していた。言語は経験から遊離した抽象との批判から会読のような対面教育が推奨されるけれども、言語と経験との往復運動を図る指導であれば、文字コミュニケーションは遠隔教育にも対面教育にも欠かせない。宣長は書簡の交流によって門人一人ひとりへの添削指導を実施したが、これは相手の「情報構造」に従った指導といえる。

キーワード：会読、講釈、問答体、遠隔座、文字コミュニケーション

はじめに

私はすでに本居宣長（享保15年・1730～享和元年・1801）の遠隔教育論の原理や実態を報告してきた¹⁾。

遠隔教育の原理は「へだたり」を生かす「やりとり」にあり、その「やりとり」によって「つながり」も強められていく、と論じた。また、宣長の遠隔教育の実態は書簡の交流だけに依存するものではなく、鈴屋での教育活動や出遊講義などの対面教育との連携によって補完されていた、と論じた。これらの論考の背後には、宣長の教育・研究活動は従来、私塾・鈴屋での対面教育のみが取り上げられてきたことへの批判がある。対面教育偏重の象徴は、戦前に佐々木信綱が発表した「松坂の一夜」とこれを教材とした国定教科書による授業にある。この教材は学校での師弟関係を称道する「美談」となって、「学校式教育」における師弟関係を重視し、対面教育の重要性を説くエピソードとなった。しかし、これは「一期一会」の象徴的なエピソードにすぎない。近年も田中康二が「松坂の一夜」を「伝説」として詳細に分析している²⁾。「松坂の一夜」で出会った賀茂真淵と宣長との実質的な師弟関係は、むしろ書簡などの交流による遠隔教育にある。教育という発想からみれば、鈴屋の意義はむしろ宣長の遠隔教育にある³⁾。

しかし、日本の近代学校が対面教育に偏重し遠隔教育を制度化してこなかったように、従来

の教育学も教室での教授・学習過程、言い換えれば口頭コミュニケーションを中核とする対面教育を研究してきた。したがって、鈴屋も対面教育中心の私塾という位置づけが続いた。第2次大戦の後は、学校通信教育や社会通信教育が制度化されたけれども、主流派教育学は依然として対面教育中心である。しかし少なくとも本居宣長の教育実践や教育思想は、対面教育よりも遠隔教育という関心から評価され直すべきである⁴⁾。

そこで、この論文では従来の教育学研究とは逆に、遠隔教育という発想から宣長の対面教育の特徴を明らかにする。とりわけ遠隔教育には欠かせない文字コミュニケーションという関心から分析する。

1 講釈と会読の評価

宣長の対面教育は講釈と会読が中心である。それぞれの特長に従って両者を組み合わせて実施すべきと、『玉勝間』⁵⁾の「こうさく くわいどく 聞書」(全集第1巻)で書く。初学者には講釈が有効である。逆に、まだみずから考える力がないので、活発に討論する会読には向かない。もちろん講釈でも要件がある。ノート(聞書)に忘れないように書き留めるのはよいが、最初から師の言うことを全部、書く者がいる。講釈はまず師の言うことをよく聞くことが大事なのに、「聞書」のために講釈を受けるのはよくないとする。講釈を聞くときは「下見」をよくして「はじめより、力のかぎり、みづからとかく思ひめぐら」し、帰宅してからも「かへり見」が必要だと強調する(同 p. 240)。

しかし理解が進んだら会読が有効だとする。会読は講釈と違い、参加者各人が自分で考えて、発表し、分からないことを論議する点はよい。しかし宣長はこの会読にも批判的である。この議論は回数が増えると、だんだん熱意がなくなり、分量を多く読もうとするので、疑問点もないがしろにする、これでは一人で読んでいるのと変わらない。また参加者の中で力が均質でないと、こんなことを聞いては恥ずかしい、邪魔になると聞かないで過ぎてしまう、この点で初心者には講釈のほうがよい、と言う。実際、鈴屋では門人・須賀直見のような力のある門人が中心となり会読も進められていたが、宣長の主催した『万葉集』の会読は途中から講釈に変更された経緯がある。

前田勉は、伊藤仁斎、荻生徂徠、また藩校や蘭学塾などが推奨した会読の流行と意義とを再評価している⁶⁾。会読は立身出世のためとか国益のためとかいう目的ではなく、カイヨワの言う「遊び」(競争の遊びである「アゴーン」など)の精神であるとの結論を引き出している。鈴屋についても「ミミクリー」(平安朝貴族らしい雅びの模倣)という「遊び」で説明している⁷⁾。たしかに総体的には「ミミクリー」の側面で説明可能ではある。しかし、宣長自身は会読には消極的であった。町人身分の門人が多いせいもあるが、前述のように初学者の聴講にはまず、文献の予習や講釈の復習を求めている。

2 京都時代の会読・講釈・書写・執筆

会読を消極的に評価しているからといっても、宣長自身はすでに、京都での遊学時代（宝暦2年・1752～宝暦7年・1757）、ほぼ20歳代に会読を講釈とともに経験している（全集第16巻『在京日記』など）。

まず入門し寄宿した堀景山の塾では、入門した宝暦2年（1752）5月には会読がはじまっている。『易経』、『詩経』、『書経』などの素読の後、すぐに『史記』の会読を開始、式日は二と七の日であった。ほぼ同時に『晋書』の会読を四と九の日を式日としては始めている。その他、『左伝』、『蒙求』、『揚子法言』、『前漢書』、『南史』、『世説新語』などの会読があった。また講釈の聴講は素読や会読には遅れるが、堀蘭沢（堀景山の次男）から『左伝』を受講している。

宝暦4年からは、医学、特に啞科（啞科とは病状を訴えることができない小児を対象とする小児科）を専門的に学ぶために堀元厚と武川幸順とに入門する。寄宿したこの武川幸順塾でも、講釈の聴講とともに、自発的に会読を進めた。門人たちと明代の基礎医学書といわれる李時珍編纂『本草綱目』、内科医書の『千金方』、小児科医書の『婴童百問』などを会読している。この幸順塾に入門してから、景山宅が同じ京で近隣なので『史記』や『前漢書』など漢籍の会読を継続していた。

つまり、宣長自身、20代の遊学時代に会読を経験していたのである。

なお、対面での学習機会には、他に、月次歌会に出席していたことも特筆すべきだろう。宝暦6年には有賀長川に入門し、松坂に帰郷後も通信添削で指導を受けているほどであるからである。医学修業の時期にも和歌への関心は捨てられなかった。

宣長はすでに十代の後半から和歌に興味をもち独学で学んでいた（『玉勝間』 全集第1巻 p.84）。医学修業の京都でも、上京した宝暦2年には新玉津嶋社司・森河章尹にも入門し歌会に出席している。この歌会には短期間しか出席していないけれども、医学修業に成果が見られた宝暦6年になっても、有賀長川に入門している。有賀は地下二条派歌人である。この歌会に宣長は熱心に出席していた。帰郷後も有賀から書簡による添削指導を仰いでいるのは、このような事情による（全集第18巻）。

この時期はすでに契沖の国学からの影響が濃厚になった時期であるが、伝統的な古今伝授の歌学にも直接、触れていたことになる。やがて、松坂での嶺松院での歌会にも出席するとともに、歌会の指導者となっていくのである。のみならず、松坂では遍照寺会などの月次歌会にも加わっている。この嶺松院や遍照寺での歌会のメンバーが宣長の講釈や会読の門人ともなるのである。しかも、『排蘆小船』（帰郷後の宝暦8、9年ころに成立したとの説が有力）を執筆し、自分も学んだ堂上派の古今伝授を厳しく批判するに至る。本書は初心者疑問に答えるような問答形式で、歌論を展開する。しかも技巧を論ずるのではなく、後年、「もののあはれ」と分析する人間の本質に遡及した詠歌や詠歌指導を論ずることになる。

京都時代の約6年間はしかも、師事した師や門人たちと会読や講釈だけを続けていたわけではない。みずから積極的に学習ノートとして文献の書写を続けていた。『和歌の浦』（全集第14巻）は上京前の延享4年（1747）からの手控えであるが、和歌に関して学んだことを記している。第1冊から第4冊に及び、内容も多岐にわたる研究ノートともいえる。私意を許さず視写によるこの抜き書きは、契沖の注釈書『古今余材抄』1冊などおびただしい分量が残存している。

京都時代の後半、医学修業中には『折肱録』（全集第19巻）の書写もある。これには医書から薬剤の調合法、病気に応じた薬剤の選択などが記録されている。また薬の調合を簡略に覚えるために「方剤歌」と称する三十一文字の和歌も創作されている。青年時代から和歌を好んでいた宣長らしい歌である。また、遊学中に執筆した漢詩文の原稿には、修業の成果をまとめた医学論文というべき文章がある。宝暦6年（1756）3月に書きたいわゆる「送藤文輿還肥序」である（全集第18巻 pp. 8～10）。

この医論で、宣長（「本居栄貞」と称す）は同門の藤文輿（肥前藩大村侯侍医）の送別の辞の形式で伝統的な漢方医学・李朱医方に従い、後藤艮山や香川修庵や山脇東洋らを名前を挙げて批判する。すでに宝暦4年には同じ京都で山脇東洋らが初めて人体を解剖し、漢方医学の五臓六腑説の間違いが指摘されていた時期である。人体観察の観察結果は『蔵志』（宝暦9年）で刊行されてもいる。また江戸では前野良沢や杉田玄白らがオランダ医学書『ターヘル・アナトミア』の翻訳に着手する前夜である。宣長はその点で実証的な医学へ接近してはいなかった。しかし、一派一学に偏ることなく臨床医となるべき方針と治療法は確立していた⁸⁾。

つまり、京都時代には景山などの学問塾で講釈の聴講や会読で学ぶだけではなく、和歌の修業、自発的な書写や執筆活動で学習していたのである。みずからの思考指導を講釈・会読に依存せず、自立的な学習によっても進められていたのである。

3 鈴屋での指導活動と研究

1) 講釈と会読

松坂に戻ってからの宣長は、医師を開業しながら、繰り返し講釈と会読を続けている。堀景山や武川幸順などでの講釈や会読と同じように、対象とする文献の学習会の式日を定め実施している。『日記』（全集第16巻）によれば、宝暦14年（明和元年・1764）の場合、『源氏物語』は二、六、十の夜、『万葉集』は四の夜と定め、実施している。

鈴屋での初期の指導実践では会読を続けている。『源氏物語』を初めて講釈した翌年、宝暦9年（1759）の元旦の読書始めに『古今和歌集』を取り上げている。『日録』によれば「今日は例にまかせて、文よみはじめに、（古）今集よみぬ」（全集第16巻 p. 145）とあり、それ以降も正月の読書始めにはしばしば『古今集』の序を取り上げている。また、親しい門人たちと

二十一代集の会読を続けてきた。明和元年（1764）の5月からは『後撰和歌集』、8月以降、『拾遺和歌集』、『後拾遺和歌集』、『金葉和歌集』、『詞花和歌集』、『千載和歌集』の会読を続けた。翌明和2年3月からも順次、『新古今和歌集』から『新統古今和歌集』までの勅撰集を会読し、安永元年（1772）1月に修了している。この間、8年間をかけたことになる。先行する勅撰集である二十一代集への思い入れの深さがわかる。会読は門人指導という側面と同時に宣長自身の研究活動を発表する機会でもあった。

このうち『古今集』については講釈も含め、その後、第4次まで取り上げる。『古事記伝』を執筆さなかであった寛政7年（1795）5月まで続けている。しかも、松坂での講釈や会読には出席できなかった門人の要請に基づき、『古今集遠鏡』を執筆し、寛政9年に刊行している。ちなみに、『新古今集』についても門人のために『新古今集美濃の家づと』を書き、寛政7年に公刊している。

もちろん、この二十一代集の会読と併行して、『古今集』、『源氏物語』、『万葉集』、『新古今集』の講釈も式日を定めて継続している。『伊勢物語』、『土左日記』、『枕草子』、『百人一首改観抄』の講釈も短い期間ながら定日の夜、実施している。全巻を読み終えると、再び最初から読み直す講釈もあった。『古今集』については前述のようにつごう4次、『源氏物語』は4次まで、『万葉集』は3次まで、『新古今集』は4次まで繰り返し実施している。なお、このうち『万葉集』については安永4年（1775）10月から天明6年（1786）10月までは会読である。この会読の後、第3次の講釈が続けられ、寛政7年（1795）にはこの『万葉集』も『源氏物語』も『古今集』もすべての講釈を修了させることになる。時に宣長、66歳の時である。

なお、江戸時代、一部の藩校や適塾などの学問塾で実践されていた輪講（学習者が順繰りに講義する方法）は見られない。宣長中心の会読と講釈であった。

2）賀茂真淵からの遠隔指導

鈴屋での教育活動と併行して、宣長は賀茂真淵から書簡の交流を中核とする遠隔指導を受けていた。宝暦13年（1763）の「松坂の一夜」で邂逅してから、明和6年（1769）に賀茂真淵が亡くなるまで足かけ7年にわたる。

具体的にいえば、宣長は真淵に対して、『万葉集』などに関する「問目」を続け、指導回答をもらっている（全集第6巻『万葉集問目』）。宣長は余白を用意した質問文を書簡で書き、真淵はその余白に赤で回答をしている。この「問目」は質疑応答の終盤になると、真淵の回答には余白（無回答）が目立つようになる。宣長の質問が次第に専門的になっていったためと見られる。

また、詠歌の添削指導も受けていた（全集第18巻）。万葉風の詠歌を創作しない宣長に対して、真淵は「歌ともなし」「歌とは聞えず」（同 p. 65）と辛辣な評価をしている。新古今風の歌ばかり詠むなら「万葉の御問も止給へ、かくては万葉は何の用にたゝぬ事也」（同 p. 66）

と叱責さえしている。

さらに、宣長は『古事記伝』の執筆をまえに、真淵に再三、古事記にかかわる文献の借覧を懇願している。拒絶もされたが、結局、借覧できた。もちろん飛脚による文献の借覧である。真淵の講釈を直接、聞くこともしないで、師の研究の成果を見せてくれというのであるから、虫のいい依頼である。真淵は自分の門人のノートを貸したこともあるが、宣長の強い要請を受けて借覧を許可する。具体的には師の『仮名古事記』（『古事記上巻・下巻真淵訓』）、『延喜式祝詞解』の一部や真淵自筆稿本である『祝詞考』の借覧を許可している。宣長はこれらの文献の書写をとおして独習していた。この借覧や和歌の添削指導や『万葉集問目』での回答のおかげで、宣長は真淵の講義や会読を受けることなく、その研究成果を受け取ることになる。

以上、宣長は対面教育で門人に教えつつ、遠隔教育で真淵から指導を受けていたのである。その後は門人への遠隔教育も続けることになる。

こうした指導とみずからの研究と併行して、その研究成果を執筆・公表していた。すなわち、講釈をはじめてまもなく『排蘆小船』（宝暦9年か）を執筆し、立て続けに、『阿毎菟知弁』（同11年）、『紫文要領』（同13年）、『石上私淑言』（同年）、『古事記伝』巻二・三の草稿（明和4年1767）、『講後談』（同6年）、『直毘霊』（同8年）などを執筆している。しかも、明和5年（1768）には最初の出版物である『草庵集玉箒』を公刊している。

この『草庵集玉箒』の出版はいわくつきである。万葉風の歌を詠め、と厳しく指摘された師の教えに背くものだからである。師は「いかで、さ様のものを註せられ候にや。（中略）よりて早く書は出さぬ事也」（明和6年某月某日・宣長宛真淵書簡。全集別巻3 p. 394）と注意していたからである。二条派地下歌人の書物を出版するなど言語道断である。宣長はそれを知っていて公刊した。もちろん真淵から叱責を受けることになる。「頓阿なと歌才有といへとかこみを出るほどの才なし」（明和6年正月27日付。全集別巻3 p. 388）との返信をもらう——私は門人には『源氏物語』や『今昔物語』までは読ませて後世の書物は禁じている。これに反して宣長はこんな書物を尊重している、そのせいで今まで見せてもらった詠歌の程度も低いのだ、と。

そのうえ、宣長は真淵『万葉集』各巻の年代、部立などの分析から「万葉集重戴歌及巻の次第」（全集第6巻）を師に提出する。明和3年のことである。内容は『万葉集』の先行研究を積み重ねてきた真淵への異見であったので、師は激怒する。「是は甚小子が意に違へり、（略）か様の御志に候はば向後小子に御問も無用の事也」（全集別巻3 p. 379）と。破門寸前である。宣長はさっそく詫び状を認め、丁重に謝罪することになる。

しかし、このような宣長の詠歌や小論に対して手厳しい批判をしつつも、真淵は『万葉集』への質疑をとおして宣長の能力・才能は高く評価したのであろう、文通を止めてはいない。晩年の真淵は視力の衰えを宣長に漏らしているほど病弱になっていた（全集別巻3 p. 390）。にもかかわらず、回答しているからである。それどころか、前述のように、江戸の師を訪問もし

ない弟子に書き入れのある『古事記』を貸与しているのである。

こうした懇切な指導にもかかわらず、宣長は県居のもとには赴かない。もちろん、真淵は明和2年12月21日宛書簡などで「ぬけ参りの様にても」江戸訪問を促している（同 p. 380）。しかしながら、宣長は県居の塾を訪問せず、もっぱら書簡の交流と書物の借覧などで遠隔方式の学習支援を受けていた。もちろん、宣長は真淵に対して謝金を渡す（江戸在住の弟が届けるなどしている）とともに、松坂から名産品などを贈って、師弟の関係は良好に保持されていた。

4 問答形式の執筆活動

ところで宣長の執筆活動は遠隔教育という関心から見て興味深い点がある。宝暦年間に執筆した著作が問答形式で整えられている点である。帰郷後まもない宝暦8、9年に成立したとされる『排蘆小船』は66項目からなる問答体である。問答は「問ひて云わく」と「答へて云わく」との形式が繰り返される。この問答体は『論語』のように弟子が師に「仁とはなにか」と問い、孔子から答えを承るという形式ではない。プラトンの対話篇にも似る質問と回答、反論と回答が続く。質問者は師の答えに対し「しからば右にいふごとくならば」と問いを敷衍し、反論を挙げたり説明の食い違いを質したりしている。また宝暦13年に執筆している『紫文要領』（全集第4巻）、『石上私淑言』（全集第2巻）いずれも問答体である。宝暦8年以来それまでに、宣長は少数の門人を相手に、前述のように二十一代集の会読や『源氏物語』や『万葉集』などの講釈を精力的に行っていた。したがって、松坂町人など少数の門人相手にその質問に答える機会が多く、執筆もこうした実態を踏まえたものであろう。鈴屋に赴くことができない門人たちは宣長と同席して学友が質問し、師が答えるのを身近に感じながら問答体の書物を読むことができただろう。

なお問答体ではないが、同じ時期に執筆した『古言指導』（全集第14巻）がある。門人が陥りやすい誤りを指摘した、読書や作文の学習指導書に近い著作である。

また、後になってのことであるが、宣長は門人たちに書簡の交流によって指導した成果を質疑応答の形式のまま、稿本をつくり一部は公刊をしている。早い著作では『答問録』（全集第1巻）がある。「或人」のほか8人の門人や非門人の質疑応答が残されている。出版は没後の天保6年（1835）となる。その他、『長瀬真幸／橘千蔭 詠歌問答の評』（全集別巻2）、『本居宣長長瀬真幸答問書』（同）、柴田常昭との質疑応答『万葉集疑問』（全集第14巻）、柴田常昭・大平・宣長『美濃の家づと疑問 同評論の評』（全集第3巻）、田中道磨との往復書簡『万葉問聞抄』（全集第6巻）、『加藤磯足後撰集疑問』（全集別巻2）、など枚挙に暇がないほどである。

問答体は講義式の著作とは異なり、学習者が疑問にもちそうな点を説明するのでわかりやすい。またこういう疑問を質問にすることが可能なのか、との学習意欲を高める効果がある。デジタル時代にQ & Aが活用されているのと同じ効用がある。

ただし安易な質問には否定的である。学問する者は優れた学者に会って質問するとき、ややもすると難しいことを選んで聞く。しかし難問は学者でも答えられないので、まずは易しいことを「いく度かへさひかむかへ」問いを明らかにすべきと助言する（全集第1巻『玉勝間』p.146）。

また、こうした質問を用意するには読書とともに先行研究の書写（写本づくり）が欠かせない。この点でも初学者向けにきめ細かい注意をしている。「物うつし物かく事」（全集第1巻『玉勝間』p.176）では写し間違いがないように、しかも「手かく事」（同）ではきれいで読みやすい文字を書くよう促している。門人からの読みにくい文字に閉口したこともあったのだろう。もっとも宣長自身も自分の文字が「いとつたなくて」（同 p.176）と反省しつつ、門人に助言している。

このように、問うことを奨励しても、そのために写本などを正確に作ること、正確に読むことを一体的に学習するよう求めている。これは宣長自身が京都時代に実行していたことでもあった。

門人と宣長との書簡上での質疑応答の過程を踏まえ、宣長は有能な門人には学習成果の公刊を勧めている。例えば門人・藤井高尚は『源氏物語』に関する解釈や『消息文例』の草稿を宣長に送り、語句の訂正に至るまで添削指導を受けてきた。この高尚に宣長は『消息文例』を書くことは重要だと強調していた。その草稿を加筆・助言してきたが、出版を本文でも尚々書でも繰り返し促している（高尚宛寛政11年12月10日付 全集別巻3 p.587）。その結果、宣長の序（「消息文例の序」 全集第15巻 p.167）を付して、宣長の死後、公刊されている。なお高尚はこれとは別に、『源氏物語』に関する自分の意見と疑問を宣長に送っている。宣長は高尚の文章に傍書したり細書したりして懇切に回答している。その成果が問答書『源注答問』（全集第18巻）である。宣長は『源氏物語玉の小櫛』を晩年の寛政8年（1796）を完成させ3年後に出版したときに、お返しのようにその序文を高尚に書かせている。

宣長は有名な「師の説になづまざる事」（『玉勝間』 全集第1巻）で説く——師の説を批判するのは恐れ多いことではあるが、だからといって頑なに守るべきではない。間違いがあったならば世間の学者に間違いが流布してしまうので正すべきである。古代の探求は一人や二人の力では困難である、と（pp.87～88）。写本も重要だが、省略や間違いがあるので、校訂した本を公に発表する意義も説く（同 pp.42～44）。

問答は当然、口頭コミュニケーションの場でも実践されていた。歌会は定期的に月になんども開かれていた。訪問者があると、臨時の歌会を開催し歓迎した。歌会は「座の文学」⁹⁾の典型である。師弟と門人同士とが対面で交流できる場である。連歌や連句に代表されるように、同志とともに当意即妙に詠む面白さがある。しかし、歌会はライブの場だけを前提にしない。詠歌の手法のひとつに「本歌取り」があるように、古歌や歌枕や優れた和歌へのオマージュが見られる。伝統的に連綿と続けられてきた五七五七七なり五七五なりの狭い型に縛られながら

も、先行する和歌との重層的連想を許す創作である。宣長は『古今集』や『新古今集』を高く評価し、それを典型とする詠歌を勧めている。『玉勝間』では「初学の詩つくるべきやうを教へたる説」を書き、「遠慮なく剽窃し」模倣による創作を勧める（同 p. 137）。

宣長にとって歌会はライブの「座」であるとともに、「遠隔座」とも呼ぶべき創作の場である。同じ空間と時間とを共有しなくとも、優れた歌人の和歌に倣って「稽古」として詠むことができるからである¹⁰⁾。したがって、文字コミュニケーションと一体なのである。

最後に、歌会などの場で行われた「なぞなぞ」に触れておこう。宣長は門人や訪れた俳諧師などと「なぞなぞ」に興じていた（全集別巻2）。「松の木をきって家をたつる」とは、とのなぞなぞには「公家」と答えるようなたわいないものである（同 p. 459）。門人たちと狂歌に興じたこともある。書簡上では交流しにくい、即興の遊びに興じ、古典学習への学習意欲を高めていたのである。

5 学習支援の基礎は文字コミュニケーション

1) 思考指導の材料

このように、宣長の鈴屋での学習支援は対面教育であれ遠隔教育であれ、文字コミュニケーションに依存していることがわかる。文体も、候文、擬古文（雅文体）、漢文体など、しかもそれらの個性的な手書きの文字が駆使され、交流している。

ところで、明治以降の「学校式教育」は対面教育を中核としてきたから、口頭コミュニケーションが基本であった。そのために教室での一斉授業や発問による一問一答の授業などが工夫されてきた。近年では、教育方法の専門家の意見を取り入れ、文部科学省もアクティブ・ラーニングを推奨しはじめている。教師による一方向的な講義形式ではなく、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等の方法が唱導されている。ネット授業の受講を前提にして対面教育を実施する際には「反転授業」(Flipped Classroom) の試みもはじまっている。

しかし、このような口頭コミュニケーションを活発にするにせよ、その基本は宣長の遠隔教育・対面教育に見られたように、文字コミュニケーションが前提となろう。アクティブ・ラーニングであれ「反転授業」であれ、学習者への指導には学習者がみずからの思考を指導できるような知識を読書などから得る必要がある。じじつ、質疑応答を活発に行い注目を浴びているマイケル・サンデルの「ハーバード白熱教室」を厳しく批判する論¹¹⁾が登場している。著者は従来の講義形式を批判しつつも、サンデルの「白熱教室」もゆっくり考えることを妨げている、彼が取り仕切る対話ではなく、学生が意見や質問が出せる読書指導こそ重要である、と指摘している。先のアクティブ・ラーニングでも、考える材料となる間接経験や直接経験が求められる。

大学通信教育の現場から考えてみよう。現在、授業の方法は印刷教材等による授業、放送授業、面接授業、メディアを利用して行う授業の4つがある。このうち印刷教材等による授業はすべての方法の基本であろう。テレビやラジオはもとより、ネットも活用しはじめた放送大学でも印刷教材がある。放送授業でも教科書を見てほしいと講師は指摘するし、学生も試験準備にはテレビやラジオより教科書を重視している。大学の学風、人格の陶冶などを目的とするとされる面接授業（スクーリング）でも、教科書はもとよりレジュメなどの印刷教材は欠かせない。メディアを利用して行う授業は印刷教材への依存度こそ低いが、音声・音響や映像・動画だけでは授業は成立しない。画面上で文字・数字を活用しないわけにはいかない。もちろん印刷教材も用意されている。

2) 経験と言語との往復運動

もとより文字コミュニケーションには限界がある。対面教育も遠隔教育も文字・数字だけでは説明できない。教室で口頭で話しかけるのであれ、教科書や参考書などの印刷教材で説明するのであれ、学習者の側にその文字・数字にかかわる経験がないとわからない。少なくとも「ぴんとくる」ようなわかり方は本人の直接経験や間接経験が欠かせない。この経験が浅いとすっきりわからない。粗くいえば、ある言語がわかるということは、その言語を自分の経験に「翻訳」してわかる。例えば、春の七草に「ゴギョウ」があることを知っても、それを古名ではなく今の「ハハコグサ」という別の言葉に言い換えたからといって、わかるとは限らない。白い毛でふかふかと包まれたハハコグサを見たり触ったりした直接経験とハハコグサの写真や動画、ハハコグサにまつわる文章を読んだ間接経験とが欠かせない。

このように言語はそれに関係する経験と結びついている。言語では表現できないようなわかり方（方法知）は、文章表現の形でわかり方（命題知）とは異なる¹²⁾。それでもなんとか表現するために、その経験のイメージを比喻や修辞法で表現する。表現してもしか、経験そのものとは区別される。

それでも、小説や詩歌などの文章の形式で直接経験に近づく表現は可能である。写真・イラスト、映像などを利用することである。これを間接経験とよぼう。この直接経験・間接経験と言語とは階層的である。同じ文章表現でも実物を直に指示する表現もあるし、現場の状況から離れた比喻的表現もある。この具体的な表現と抽象的な表現との間には階層がある。したがって、言語と経験は本人のなかで階層的な「情報構造」をとっている。ここで「情報構造」とよぶのは、パソコンのようなネットワークではなく、本人の心身に組み込まれた知り方である。各人の知り方・わかり方は各人が得た無数の情報を多種多様な組合わせからなる「情報構造」に従っている、と説明できよう。したがって、学習者も指導者もこの階層的な「情報構造」に根ざして、コミュニケーションをとると、わかる可能性が高いのである。ただ、文章が指示するような直接経験をするのには限界がある。知らない・わからない植物は無数にある。しかし、

その植物が指示するような状況を描いた読書をしたり、映像で視聴したりする間接的な経験が豊かであれば、知り方やわかり方は深まる。そのためには、繰り返し言語と経験との「はしご」を往復するしかない。

おわりに

宣長本人や鈴屋門人が実践していたのは、読書ではあるが多彩な読書である。黙読という見る読書だけではない。聴講や朗読（素読）という聞く読書もあれば、筆写（視写）という書く読書も併行していた。もちろん、このような多彩な読書は対面教育での口頭コミュニケーションによって補われていた。宣長は『講後談』（全集第14巻）を残しているが、これは講釈や会読などの後に話した談話の記録である。明和6年（1769）4月からの2年間程度の短い期間しか記されていないし、内容は儒学批判から読書法や幼児の言語習得など内容は一貫性がない。しかし門人それぞれの「情報構造」に訴える機会があったことがうかがえる。前述の『古今集遠鏡』が口語訳であったことも門人の経験に近い言語表現で工夫していたのである。

この言語と経験との階層の情報構造を往復するには、文字・数字だけでは限界がある。印刷教材だけではなく、文字・数字も音声も映像も一体的に取り込むことができるデジタル教材は欠かせない。この意味で、遠隔教育はもちろん対面教育においても、ネットを活用したデジタル教材の開発は今後の課題である。しかし、ネット上でのデジタル化した添削指導を含め、一人ひとりの学習者の関心や力量に応じた指導には文字コミュニケーションはきわめて重要である。宣長の遠隔指導はこの点で今日的な意義がある。

注

- (1) 白石克己「本居宣長にみる遠隔教育の原理—『へだたり』・『やりとり』・『つながり』—」（田中克佳編著『「教育」を問う教育学』 慶應義塾大学出版会 2006）
同「遠隔教育と対面教育との連携—本居宣長にみる教育と研究」（『佛教大学総合研究所紀要』13号 2006）
同「本居宣長の自学習論—門人との書簡の交流をととして」（『研究助成報告論文集』上廣倫理財団 2000）
- (2) 田中康二「近代宣長像の形成と変容（上）—『松坂の一夜』伝説の成立」（『本居宣長の東アジア戦争』 ぺりかん社 2009）
- (3) 白石克己「日本における遠隔教育の起源—鈴屋の意義」（『鈴屋学会報』第16号 1999）
- (4) 私は生涯学習の類型として、寄宿方式、通学方式による対面教育と遠隔教育とを指摘し、江戸時代にも対面教育と並び遠隔教育があったことを指摘した。「歴史の探求—生涯学習の原型」（『日本生涯教育学会年報』第28号 2007）
- (5) 以下、本居宣長の著作からの引用は『本居宣長全集』全20巻・別巻全3巻 筑摩書房 1968～1993年による。この全集からの引用は引用文の後に（ ）で示す。なお必要に応じ書名も添えた。旧字体は原則として新字体に改めた。また、宣長の著作の刊行年、門人の表記などは基本的に本居宣長記念館編

『本居宣長事典』（東京堂出版 2001年）に従った。

- (6) 前田勉『江戸の読書会―会読の思想史』平凡社 2012
- (7) 同 p. 136
- (8) 高橋正夫『本居宣長―済世の医心』講談社学術文庫 1986
- (9) 尾形侑『座の文学―連衆心と俳諧の成立』講談社学術文庫 1997。（初版は1973）
- (10) 白石克己『『生涯稽古』の思想』（『日本生涯教育学会年報』第35号 2014）
- (11) 宇佐美寛・池田久美子『対話の害』さくら社 2015。読書指導や課題図書的重要性については p. 166 や p. 190 などに指摘がある。
- (12) 詳細な論究は拙論にゆずる。「命題知と方法知との往復運動」『日本生涯教育学会年報』第20号 1999)

（しらいし かつみ 研究代表／佛教大学教育学部教授）